

アルファアルファタコゾウムシ (*Hypera postica*)  
に関する病害虫リスクアナリシス報告書

平成25年4月8日  
横浜植物防疫所調査研究部

## 第1 開始（ステージ1）

### 1 開始

病害虫のリスクに応じて効果的かつ効率的な植物検疫を実施していくためには、検疫対象の有害動植物（以下「検疫有害動植物」という。）を特定することが重要である。また、国際植物防疫条約（以下「IPPC」という。）の規定においても、検疫有害動植物の明示及び病害虫リスクアナリシス（以下「リスクアナリシス」という。）の結果に基づく病害虫リスク管理措置の実施を求めている。

このため、平成23年3月7日に植物防疫法施行規則（昭和25年農林省令第73号）の改正等を行い、検疫有害動植物の定め方をネガティブリスト方式からポジティブリスト方式へ移行するとともに、病害虫のリスクに応じた適切な病害虫リスク管理措置を実施するため、輸出国において検疫措置の実施を求める枠組みを新設する等の見直しを実施した。

引き続き、検疫有害動植物の特定及び適切な病害虫リスク管理措置の適用に係る検討のための技術的正当性の判断に資するため、我が国に侵入し、まん延した場合に有用な植物に損害を与えるおそれが未だ明らかでない有害動植物について、順次、病害虫を開始点とするリスクアナリシスを実施している。

今般、リストアップした対象の有害動植物について、IPPCが作成した植物検疫措置に関する国際基準に基づく手順に沿ってリスクアナリシスを実施した。

### 2 対象となる有害動植物

リスクアナリシスの対象となる有害動植物名をアルファルファタコゾウムシ（*Hypera postica*）と特定した。

関連する学名等の情報は、生物学的情報（別紙）に取りまとめた。

### 3 対象となる経路

リスクアナリシスの対象となる経路は、検討対象とする有害動植物の発生地域から輸入される寄主・宿主植物とする。関連する寄主・宿主植物等の情報は、生物学的情報（別紙）に記載する。

### 4 対象となる地域

リスクアナリシスを実施する地域を日本全域とした。

### 5 開始の結論

アルファルファタコゾウムシ（*Hypera postica*）を開始点とし、本種の発生地域から輸入される植物を経路とした日本全域を対象とする病害虫リスクアナリシスを開始する。なお、リスクアナリシスに必要な情報は、生物学的情報（別紙）に記載する。

## 第2 病害虫リスク評価（ステージ2）

### 1 有害動植物の類別

ステージ1で特定された有害動植物について、国内における発生及び公的防除の有無、定着及びまん延の可能性並びに経済的影響を及ぼす可能性について調査し、検疫有害動植物の定義内の基準を満たしているかどうかを検討する。なお、検疫有害動植物の基準を満たしていない場合は、それが判明した時点で評価を中止し病害虫のリスクは「無視できる」とする。

#### (1) 有害動植物のアイデンティティ

##### ア 名称

学名：*Hypera postica*

和名：アルファルファタコゾウムシ

##### イ 分類

目：Coleoptera（コウチュウ目）

科：Curculionidae（ゾウムシ科）

##### ウ 系統等

植物検疫上考慮すべき系統等が存在するとの情報は得られなかった。

##### エ 他の有害動植物を媒介する能力

日本未発生のウイルスである **Broad bean mottle virus** を媒介することが報告されている。

#### (2) 有害動植物の日本での発生の有無及び公的防除の有無等

##### ア 日本での発生状況

本州、九州及び沖縄に発生している。

##### イ 公的防除の実施状況

本種に対して公的防除は実施していない。

#### (3) 評価にあたっての不確実性

本種は、上記のとおりウイルスを媒介することが知られており、また、媒介されるウイルスのリスクアナリシスが完了していないことから、不確実性を伴う。

#### (4) 有害動植物の類別の結論

本種は国内に発生しており、国内に存在する個体群と海外に存在する個体群の間には分類学上明確に区別されるとの情報はなく、日本と海外における本種の寄主・宿主植物に対する経済的な影響に差があるとの報告もない。また、本種は公的防除の対象ではなく、今後対象とする計画もない。以上から、本種は検疫有害動物の要件を満たしていないと判断した。

なお、本種は、上記のとおり日本未発生のウイルスを媒介することが報告されているが、媒介されるウイルスのリスクアナリシスは完了していない。

このため、本種が栽培の用に供する植物に付着していた場合、本種を媒介したウイルスの侵入及びまん延の可能性並びに我が国の農業生産に対する経済的影響は不明である。

## 2 リスク評価の結論

本種は検疫有害動物の要件を満たしていないことから、リスクアナリシスを中止する。しかし、栽培の用に供する植物に本種が付着していた場合、本種が媒介するウイルスに対するリスクアナリシスが未了であるため、媒介するウイルスの侵入及びまん延の可能性並びに我が国の農業生産に対する経済的影響が不明である。よって、別途、媒介するウイルスに対するリスクアナリシスを実施して、リスク管理措置の適用の可否を判断できるまで、栽培の用に供する植物に本種が付着している場合、暫定的に検疫対象とし管理措置を適用する必要がある。

一方、本種が栽培用に供する植物以外の植物（野菜、果実、切花等の消費の用に供する植物）に付着している場合は、本種を媒介して国内の栽培地で栽培される作物等へウイルスが伝搬される可能性はきわめて低いとされていることから、本種のリスクは「無視できる」、管理措置の適用は不要と考える。

## 3 リスクアナリシスの結論

本種について、栽培の用に供する植物に付着するものを除きリスク管理措置を必要としないものに位置づけることが妥当であると判断した。

アルファルファタコゾウムシ *Hypera postica* に関する生物学的情報

1 学名及び分類

(1) 学名

*Hypera postica*

(2) 英名、和名等

英名：lucerne weevil、alfalfa weevil、weevil, alfalfa, weevil, lucerne

和名：アルファルファタコゾウムシ

(3) 分類

種類：昆虫

目：Coleoptera (コウチュウ目)

科：Curculionidae (ゾウムシ科)

(4) 系統等

植物検疫上考慮すべき系統等が存在するとの情報は得られなかった。

2 寄主植物

アズキ、インゲンマメ、カボチャ、キュウリ、ササゲ、シロウリ、スイカ、ダイコン、ダイズ、マクワウリ、メロン、マメ科牧草(梅谷, 2003、日本応用動物昆虫学会, 2006)

3 寄生部位

幼虫及び成虫が茎、葉、花を加害する。(CABI, 2013a)

4 地理的分布

日本：本州、九州、沖縄(九州大学, 1989)

世界：次の国・地域(CABI, 2013a、九州大学, 1989)

[アジア]

インド、インドネシア、キプロス、パキスタン、フィリピン、ブルネイ、マレーシア、モンゴル

[中東]

アフガニスタン、イスラエル、イラク、イラン、サウジアラビア、トルコ、レバノン

[欧州]

アイルランド、アゼルバイジャン、アルバニア、アルメニア、イタリア、ウクライナ、ウズベキスタン、英国、エストニア、オーストリア、ギリシャ、クロアチア、キルギス、クロアチア、ジブラルタル(英領)、スイス、スウェーデン、スペイン、スペイン、スロバキア、スロベニア、セルビア、タジキスタン、チェコ、ドイツ、トルクメニスタン、ノルウェー、ハンガリー、フランス、ブルガリア、ベルギー、ポーランド、ボスニア・ヘルツェゴビナ、ポルトガル、マルタ、モンテネグロ、ラトビア、リトアニア、ルーマニア、

- ロシア
- [アフリカ]
  - アルジェリア、エジプト、チュニジア、リビア
- [北米]
  - アメリカ合衆国、カナダ
- [中南米]
  - メキシコ
- [大洋州]
  - オーストラリア、パプアニューギニア、サモア、米領サモア

## 5 移動分散方法

幼虫が歩行、成虫が飛翔及び歩行する。(CABI, 2013a)

## 6 形態及び生態

卵の大きさは 0.55 ～ 0.76mm で黄色、4 齢幼虫は体長約 7 ～ 10mm、幅 2.25mm で暗緑色、背部に白色線を有する。蛹は体長 4.0 ～ 5.5mm、幅 3.0 ～ 4.5mm で緑色。成虫は体長 3.0 ～ 6.5mm で褐色。日本では通常は年 1 世代で、成虫は 5 月に出現し、マメ科植物などを摂食した後夏眠し、10 月頃から再び活動を開始する。越冬休眠はせず、12 月頃から 5 月にかけて産卵し、幼虫は 3 月頃から出現して 4 月に最も多くなる。老熟幼虫は茎葉、地際部などに繭を作って蛹化する。(CABI, 2013a、梅谷, 2003)

## 7 被害

### (1) 被害様式

ヨーロッパ原産で、アルファルファなどのマメ科牧草の世界的な害虫として知られる。日本では 1982 年に九州および沖縄で初めて発見された。ウマゴヤシ属植物を中心とした雑草を加害していたが、分布拡大に伴いレンゲの被害が大きくなり、養蜂業に被害を与えている。また、成虫がメロン、キュウリ、ダイコンなども加害しているが、被害は軽微である。(梅谷, 2003)

### (2) 媒介する有害動植物

本種が媒介する有害動植物として以下の記録がある。(Fortass and Bos, 1993)

- ア 日本未発生
  - 伝搬様式不明 : Broad bean mottle virus
- イ 日本既発生
  - 報告なし

## 8 防除

日本ではマメ科牧草等の適用農薬として、本種を含むハムシ類に対する薬剤の登録がある。(FAMIC, 2013)

## 引用文献

CAB International (2013a) *Crop protection compendium*. CAB International

(<http://www.cabicompendium.org/cpc/home.asp>)

Fortass M., Bos L. (1993) Broad bean mottle virus in Morocco; variability, interaction with food legume species, and seed transmission in faba bean, pea, and chickpea. *Netherlands Journal of Plant Pathology* 99.

梅谷献二・岡田利承 編 (2003) 日本農業害虫大事典. 全国農村教育協会. 1203pp.

九州大学農学部昆虫学教室・日本野生生物研究センター(1989) 日本産昆虫総目録. 九州大学農学部昆虫学教室・日本野生生物研究センター編, 平嶋義宏監修 九州大学農学部昆虫学教室 (<http://konchudb.agr.agr.kyushu-u.ac.jp/mokuroku/index-j.html>)

日本応用動物昆虫学会(2006) 農林有害動物・昆虫名鑑 増補改訂版. 日本応用動物昆虫学会 編集・発行 387pp.

農林水産消費安全技術センター(FAMIC) (2013) 農薬登録情報.  
(<http://www.acis.famic.go.jp/ddownload/index.htm>)